学 術 調 査 報 告 書

2008 年　3 月　19 日

（フリガナ）	（イトウアキエ）	入学年度	2006 年度
申請者名	伊藤秋江	学年	2 年

研究題目	アレナスとピニェーラにおけるキューバ性 ―　テクスト分析を通して　―
主任指導教員	杉浦 勉

(1) 学術調査の目的

私はキューバ人の作家レイナルド・アレナス（Reinaldo Arenas, 1943 - 1990）およびビルヒリオ・ピニェーラ（Virgilio Piñera, 1912 - 1979）の作品を研究対象としている。今回の調査は、博士論文の執筆に向けての資料収集および現地調査を目的としている。

今回の調査では、この二人の作家を直接知るハバナ（キューバ）在住の研究者や作家に取材をし、二人の人物像や伝記的事実にも踏み込みつつ、キューバ国内における彼らの作品に関する研究の現状を探るつもりである。キューバという国はその閉鎖的な特徴ゆえ、現地での研究の現状がキューバ国外からは非常に分かりづらい。この二人の作家が反体制派であるとされ、カストロ政権から厳しい監視を受けてきた経緯を考えればなおさらである。キューバ国内の文学研究者は、二人の作家に関する研究書を国内で出版することもままならない。キューバ国外でこの二人の作家に関する研究が盛んに行なわれる一方で、キューバ国内での研究はほとんど知られていないのである。

レイナルド・アレナスは自伝的な傾向の強い作品を多く持つ作家であるが、特に幼少期に過ごしたオルギン（Holguín）の村のイメージは繰り返し登場し、彼の作品の非常に重要なモチーフとなっている。今回はアレナスの原風景ともいえるこのオルギンの村を訪れ、彼の作品を知る手がかりとしたい。ちなみに、アレナスの育った村に関しては諸説あり未だ特定されていない（オルギンもしくはその近郊にある寒村という点では一致している）ため、今回の調査ではその特定も試みたい。

ビルヒリオ・ピニェーラは戯曲家としても名高い。私は昨年 8 月から一年間メキシコへ留学した際に、ピニェーラの戯曲の分析を行なっていた。残念ながら、機会に恵まれず彼

の作品を実際に舞台で観ることは叶わなかったが、その独創的な作風にすっかり魅了されてしまった。ピニェーラの作品を含むキューバの現代演劇は私の関心事の一つであり、今後の研究に活かしてゆきたいテーマでもある。今回の調査で、ハバナの劇場で上演される作品の傾向を調査し、資料を収集したいと考えている。また、ピニェーラの戯曲作品の上演記録を調査し、留学中に行なった研究を進展させたい。

(2) 調査実施地および期間

2008 年 2 月 15 日～2 月 20 日：　ハバナ（La Habana，キューバ）

2008 年 2 月 21 日～2 月 25 日：　オルギン（Holguín，キューバ）

2008 年 2 月 27 日～3 月 2 日；　ハバナ（La Habana，キューバ）

(3) 学術調査の具体的な実施内容（詳細に記入すること）

2 月 15 日（ハバナ）

●国際書籍見本市（Feria Internacional del Libro 2008）での資料収集およびキューバ現代文学の現状調査

2 月 16 日（ハバナ）

●国際書籍見本市での資料収集およびキューバ現代文学の現状調査

●ハバナ市内の本屋での資料収集

2 月 17 日（ハバナ）

●レイナルド・アレナスの母親との面会およびアレナスの親戚への取材

●ハバナ市内の本屋での資料収集

2 月 18 日（ハバナ）

●ノルベルト・コディーナ・ボエラス（Norberto Codina Boeras，雑誌「ガセタ（Gaceta）」の編集者）への取材

●国際書籍見本市での資料収集およびキューバ現代文学の現状調査

2 月 19 日（ハバナ）

●国際書籍見本市での資料収集およびキューバ現代文学の現状調査

●収集した資料の整理

2 月 20 日（ハバナ）

●国際書籍見本市での資料収集およびキューバ現代文学の現状調査

●ハバナ市内の本屋での資料収集

2 月 21 日（オルギン）

●作家芸術家連盟（UNEAC）で行われた文学に関する講演会への参加

●オルギンの町の探索

2 月 22 日（オルギン）

●デルフィン･プラッツ（Delfín Prats，詩人・アレナスの友人）への取材

●オルギンの町の探索

2 月 23 日（オルギン）

●ヒバラ（Gíbara，オルギン近郊の村・アレナス所縁の地）の訪問

●デルフィン・プラッツへの取材

●ガブリエル・ペレス（Ghabriel Perez，詩人・アレナス研究者）への取材

2 月 24 日（オルギン）

●アレナスが少年時代を過ごした家を訪問

●アレナスの親戚（叔父夫婦）への取材

2 月 25 日（オルギン）

●アレナスの親戚（叔父夫婦）への取材

●オルギンの町の探索

2 月 27 日（ハバナ）

●国立図書館での資料収集

●ハバナ市内の本屋での資料収集

2 月 28 日（ハバナ）

●アレナスの母親との面会およびアレナスの親戚への取材

●ハバナ市内の本屋での資料収集

2 月 29 日（ハバナ）

●トマス・フェルナンデス・ロバイナ（Tomás Fernández Robaina，国立図書館勤務・アフロキューバ文化研究者・アレナスの友人）への取材

●国立図書館での資料収集

●ハバナ市内の本屋での資料収集

3 月 1 日（ハバナ）

●収集した資料の整理

●ハバナ市内の本屋での資料収集

●アドルフォ・ジャウラド劇場（El teatro-sala Adolfo Llaurado）での演劇鑑賞

3 月 2 日（ハバナ）

●レイナルド・ゴンサレス（Reynaldo Gonzalez，作家・アレナスの友人）への取材

●ハバナ市内の本屋での資料収集

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

今回の調査では、レイナルド・アレナスやビルヒリオ･ピニェーラを直接知る多くの人物に会い貴重な話を聞くことができた。特にアレナスの友人でアレナスの小説に度々登場するトマス・フェルナンデス・ロバイナ（Tomás Fernández Robaina，アレナスの小説の中では“トマシート”と呼ばれている）は、私の調査に全面的に協力してくれた。ハバナでの協力のみならず、オルギンの友人に連絡を取って私のアテンドを依頼してくれたのも彼

であった。彼はアレナスの友人として海外で多くの講演を行うアレナスの研究者でもあり、近々アレナスに関する著作も出版する予定である。今回の彼への取材は、その出版間近の著作の話題を中心に行った。その著作は『ある天使のためのミサ』（原題 *Misa para un ángel*）と題された断章形式のテクストで、本人によれば、交霊術によって（彼はサンテリアの専門家でもある）アレナスの魂を呼び出し、そこでの対話を記述したものだそうだ。研究書の類ではなく、証言とフィクションの入り混じったエッセイのような作品であるといえる。著者はこの作品のなかにアレナスに関する多くの証言を盛り込んでおり、この著作がアレナスの作品を研究する上での重要な資料になることは間違いないであろう。トマスはこの出版前の原稿を好意で私に預けてくれた。

また、アレナスの友人であり著名な作家のレイナルド・ゴンサレス（Reynaldo Gonzalez, 1940 - ）との取材も非常に有意義なものであった。レイナルド・ゴンサレスは、アレナスに関する著作はないものの、アレナスのキューバ時代の親しい友人の一人であり、多くの貴重な話を聞かせてくれた。彼はレサマ・リマ（Lezama Lima，1910 - 1976）やビルヒリオ・ピニェーラに関する研究で評価の高い文学研究者でもあり、アレナスの作品に関する鋭い意見をきくこともできた。彼がアレナスと知り合ったのは、65 年にアレナスが UNEAC 主催の小説コンクールに入賞したことがきっかけだったそうだ。それ以後 80 年にアレナスが亡命するまで、彼らの友情は続いたという。彼は当時（70 年代）の作家たちの置かれた厳しい状況を生々しく語ってくれた。当時は同性愛者に対する取り締まりが厳しくなっていて、多くの作家が追い詰められていったのだそうだ。当時の重要な作家の大半が同性愛者であり、アレナスもピニェーラもアントン・アルファ（Antón Arrufat，1935 - ，作家・アレナスの友人）もレイナルド・ゴンサレス自身も迫害の対象であったという。そんな中で彼らが選択した道は大きく二つに分かれたのだそうだ。一方は、アレナスのように亡命し外国からカストロ批判を展開し攻撃的な方法でキューバの変革を望む、もう一方は、現在のレイナルド・ゴンサレスやアントン・アルファのようにキューバ国内に残り革命政府とうまく折り合いながら穏健な方法で内部から改革を望む、というものだった。結果的には異なる選択をしたものの、レイナルド・ゴンサレスにとってアレナスは、当時の辛い状況を共に闘った同士のようなものであったようだ。

オルギンでは、アレナスの友人で同じくアレナスの小説に頻繁に登場するデルフィン・プラッツ（Delfín Prats，1945 - ，アレナスの小説には“イラム・プラット（Hiram Pratt）”

という名前で登場する）に取材をすることができた。デルフィン・プラッツはオルギンに住む詩人で、アレナスと似たタイプの作家であると言われている。彼はアレナスが 80 年にキューバを出るまで親しくしていた友人で、アレナスがオルギンを訪れる度に連れ立って出かけていたのだそうだ。彼はアレナスと共によく通っていたヒバラの海岸に私を案内してくれ、そこでアレナスとの想い出を語ってくれた。彼との取材のなかで青年期のアレナスの姿が生々しく蘇り、当時生み出された彼の作品への理解がさらに深まったような気がした。また、アレナスの自伝小説『夜になるまえに（*Antes que anochezca*）』について尋ねると、単なる自伝ではなくフィクションと証言をうまく織り交ぜた見事な小説だと高く評価したものの、一方で「もっとリアルで（カストロ政府に）攻撃的なものを期待していた」とも語った。ちなみに、この『夜になるまえに』に関しては、当時出版できなかったフラグメントを加えた新しい版が 2010 年にアメリカのプリンストン大学から出版される予定だと、ハバナで知り合ったある文学研究者から聞いている。

オルギンの若い詩人でアレナス研究者のガブリエル・ペレス（Ghabriel Perez, 1968 - ）との出会いも貴重な体験となった。アレナスが少年時代を過ごした家の近所に生まれ、現在も住んでいる彼の詩はアレナスの作品の影響を強く受けていると言われている。私が彼と出会ったのはハバナで行われていた国際書籍見本市の会場であった。出版したばかりの詩集『僕の危険な友情（*Mis amistades peligrosas*）』の紹介のために訪れていた彼をトマスが紹介してくれたのだ。私たちはその後オルギンで何度か会い、アレナスや彼の作品に関して意見を交換し合った。ガブリエル･ペレスもまた同性愛者で、特にその点でアレナスに共感しているようだった。彼は、類まれな才能に恵まれながらも同性愛者であるがゆえに迫害され続けたアレナスの境遇に強く関心を持っているようだった。

また、オルギンでは多くの作家や詩人に出会い、彼らとの対話の中で地方都市に住む作家の現状を知ることになった。オルギンはキューバ第三の都市で芸術活動の盛んな文化的な都市として名高い。しかしながら、作家たちの活動環境は非常に厳しいようである。紙不足のため作家は自分の出版した本すら手元に置くことができないし、創作のためのパソコンも自宅に所有している作家は多くはないようだ。キューバ国外で出版された書籍は入手が困難なため、誰かが所有する数少ない本を皆で共有するというのが現状のようだ。電話やインターネットなどの通信機器の普及は進んでおらず、インターネットや電話を自宅に持つことができるのは外貨を獲得できる手段を持つ一部の富裕層に限られるため、作家

といえども必要な情報を自由に手に入れることも外部と手軽に連絡を取ることもできないようだ。

今回の調査では、アレナスの小説に登場するいくつかの場所を訪れることができたのも大きな収穫であった。今回オルギンで訪れたアレナスが少年時代を過ごした家は、彼の作品群の核となる小説五部作「ペンタゴニア（Pentagonía）」の第二作目『真っ白いスカンクどもの館（*El palacio de las blanquísimas mofetas*）』の舞台となっている。現在は別の家族が住んでいるため家の中には入ることができなかったが、家主の好意で外観の写真を撮影することができた。建て替えなどは行われておらず、建物は当時のままだそうだ。また、同じく『真っ白いスカンクどもの館』で度々登場する「エル・レページョ（El Repello）」というバーのあった場所（すでに取り壊されていたが）にも行き、当時の様子を知る人たちに話を聞いた。そこは屋根も壁もない空間にラジカセで音楽を流しているだけの場所だったらしい。そこには売春婦が屯し、客が声をかけてくるのを待つ。客が目当ての売春婦に声をかけダンスを踊る。店の女将エウフラシア（Eufrasia）はそこにいる売春婦とダンスする客から料金を取るのだそうだ。客が売春婦とダンスをしているとエウフラシアが客の肩を叩く。これが料金請求の合図だったそうだ。客と売春婦は互いに交渉が成立すれば店を出て別の場所に行く。この光景は、アレナスが自伝小説『夜になるまえに』で描いている様子そのままである。また、詩人のデルフィン･プラッツと訪れたヒバラの海岸は、若い頃のデルフィンとアレナスが度々海水浴に訪れた場所で、自伝小説『夜になるまえに』にも度々登場している。アレナスの生家はオルギンとヒバラの間にある小さな村にあったが、すでに取り壊されており現在は何も残っていないそうだ。その村には交通手段の問題で訪れることができなかったが、ヒバラに向かう乗り合いタクシーで近くを通ることができた。

今回の調査では、キューバに住むアレナスの家族にも取材ができた。ハバナではアレナスの母親や叔母、従姉妹に、オルギンではアレナスの叔父夫婦に会うことができた。ハバナに住むアレナスの母親オネイダ・フエンテス（Oneida Fuentes）はすでにかなりの高齢でパーキンソン病を患っておりほとんど話をすることができない状態であったが、私の訪問を快く受け入れてくれた。病気の彼女に代わって私に話をしてくれたのは、一緒に住んでいるアレナスの叔母オネリア・フエンテス（Oneria Fuentes）であった。叔母オネリアは、母親のオネイダやフエンテス一家の話題を中心に様々な想い出話を語ってくれた。ア

レナスには自伝的要素の強い作品も多いので、彼女の話は非常に興味深いものであった。また、そこにはアレナスが愛してやまなかった従姉妹のマリセラ・コルドベス（Maricela Cordovez）の姿があった。アレナスは「ペンタゴニア」の第一作『夜明け前のセレスティーノ（Celestino antes del arba）』を彼女に捧げており、その作品のなかにも彼女を登場させている。彼女は知的障害者であるため取材という形で話を聞くことは控えたものの、いくらか言葉を交わすことができた。また、オルギンの叔父夫婦も非常に友好的に私を受け入れてくれた。特にアレナスの叔父のカルロス・フエンテス（Carlos Fuentes）は、2004年にマヌエル・サジャス（Manuel Zayas，1975 - ，亡命キューバ人，スペイン在住）によって製作されたアレナスに関するドキュメンタリー映画「セレス・エストラバガンテス」（*Seres extravagantes*，2004 年，スペイン）にも出演しており、突然の訪問にもかかわらず気軽に取材に応じてくれた。カルロス・フエンテス夫妻はアレナスが少年時代を過ごした家の近所に住んでおり、当時のアレナスの様子を克明に記憶していた。アレナスはハバナに引っ越してからも頻繁にオルギンを訪れていたが、その当時の様子も詳しく話してくれた。また、アレナスは同性愛者だということを理由に一族から煙たがられ除け者にされていたことも話してくれた。アレナスが当局に追われ、追っ手がオルギンの家にまでやってきたときもカルロス・フエンテスはその場に居合わせたそうだ。このようなアレナスの家族との接触は、私のなかのアレナス像をより鮮明にしてくれ、彼の作品を理解するヒントを与えてくれる。

また、先に言及したアレナスに関するドキュメンタリー映画「セレス･エストラバガンテス」も入手することができた。この映画には、アレナス本人をはじめ、トマス・フェルナンデス・ロバイナ、アントン・アルファ、デルフィン・プラッツ、イングリット・ゴンサレス（Ingrid Gonzales, アレナスの元妻）、ホセ・ロベルト・アレナス（José Roberto Arenas, 1973 - ，アレナスの元妻イングリット・ゴンサレスの息子、アレナスとは血は繋がっていないが彼の姓を引き継いだ）、ホセ・アントニオ・アレナス（José Antonio Arenas，アレナスの父，アレナスが生まれてすぐ出て行った）、カルロス・フエンテス（アレナスの叔父）、オネイダ・フエンテス（アレナスの母）が登場し、それまで知られていなかったレイナルド・アレナスの素顔を描いている。今回の調査では、アレナスの元妻イングリット・ゴンサレスやその息子ホセ・ロベルト・アレナス、アレナスの父ホセ・アントニオ・アレナスには連絡を取らなかったが、このドキュメンタリー映画の映像と今回取材できた人々から

の話で充分な情報が得られたと満足している。

ハバナで訪れた国際書籍見本市は、キューバの現代文学の現状を調査するのに非常に役に立った。2 月 13 日から始まったこの書籍見本市は 24 日までハバナで行われ、その後国内のいくつかの都市を巡り、オルギンで 3 月 9 日に終了するものだった。今年の開催は、アントン・アルファとグラジエラ・ポゴロッティ（Graziella Pogolotti，1932 - ，批評家・作家・アレナスの友人）という二人の作家に捧げられており、会場のいたるところでこの二人の姿をみることができた。私は 2004 年に修士論文の資料収集でキューバを訪れた際にこの二人の作家とすでに知り合っており、今回の調査でも取材を申し込む予定であった。しかしながら、調査の日程がこの書籍見本市の日程と重なってしまったため、多忙な二人に取材を依頼するのは難しいと考え今回は断念せざるを得なかった。取材は出来なかったものの、書籍見本市の会場で短い時間ではあったが彼らと話をすることができ、書籍見本市で売り出されていた彼らの著作を購入することができた。私はハバナでの開催中に計 5 日この書籍見本市に足を運び、様々な本の紹介や講演に立会うことができた。また、多くの作家や詩人とも知り合い、文学について意見を交換することもできた。彼らのなかには日本の文学に関心を持っている人も多く、三島由紀夫や川端康成などの作家が話題に上った。この書籍見本市ではキューバの出版社がブースの大半を占めており、しかも販売されている書籍はほとんどが国内消費向けであるため、通常ではなかなか手に入らない多くの書籍を安価で入手することができた。書籍見本市の全体的な傾向は、やはり「革命」に関する書籍が主流であるといえる。これは文学関係の書籍についても同様で、「革命」の歴史に関連付けて論じられたエッセイや研究書などがかなりの割合を占めていたように思う。また、社会主義思想系の書籍の紹介や販売も、予想通り非常に多かったように思う。

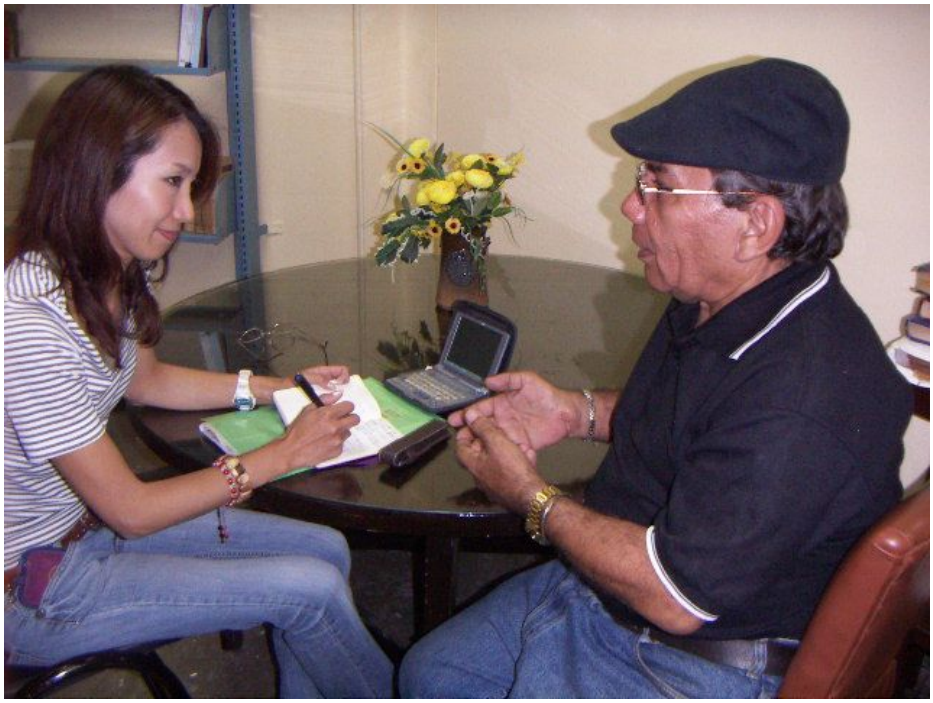
今回キューバを訪問しレイナルド・アレナスについて多くの人に尋ねたが、2004 年に訪れた際に比べて随分と異なる印象を受けた。アレナスの著書がキューバ国内で出版されないという状況は現在も変わっていないが（この点に関しては、著作権がキューバ国内にないという問題もある）、アレナス、あるいはアレナスの作品に関する研究は 2004 年当時に比べ随分増えているような印象を受けた。しかしながら、アレナスや彼の作品の研究書が国際書籍見本市や市内の本屋に並ぶことはないようで（少なくとも私は一冊もみなかったし、尋ねてもあったためしがなかった）、結局のところホセ・マルティ（José Marti、1853 - 1895）やアレホ・カルペンティエール（Alejo Carpentier，1904 - 1980）のような“キ

ューバの誇る英雄的作家”という地位には至っていないようだ。ちなみに、レイナルド・アレナスという作家がキューバ国内で公に認められ始めたのは、2001 年にアレナスの小説『夜明け前のセレスティーノ』（アレナスが唯一キューバ国内で出版することのできた作品）の主人公セレスティーノに因んだ文学賞「セレスティーノ賞（Premio Celestino, 短編小説部門)」が創設された頃であると考えられる。一方、生涯キューバ国内に残ったビルヒリオ・ピニェーラに関しては、研究者も話題にしやすいのか、研究はさらに多く研究書も多数出回っている。

今回の調査で収集した資料や書籍を現在整理しているところである。これらの資料は今後進めていく博士論文の執筆に役立てるつもりである。また、今回の調査を通してレイナルド・アレナスやビルヒリオ・ピニェーラに関係のある多くの人々と出会うことができ、非常に有意義な結果になったと思う。今後は、この調査を援助して下さった方々に心から感謝し、博士論文の執筆に精進したいと思う。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

国際書籍見本市のハバナ会場にて



レイナルド･アレナス研究者　トマス・フェルナンデス・ロバイナ氏と

作家　レイナルド・ゴンサレス氏と

キューバ作家芸術家連盟